

各地の便り

私の堆肥利用法

今、堆肥センターでは、耕種農家との連携、堆肥の流通等が課題となっております。

堆肥生産の増加が見込まれる状況のなかで、堆肥の大量の使用が期待されるのが、耕種の中心作物である水稲、麦類、大豆等への利用です。

今回は、転作田を借り上げ、大規模に大豆、麦を栽培し、土づくりに堆肥を使用している栃木県黒磯市の「下・北・沓掛大豆機械利用組合」の話を聞きました。

この組合は、平成11年度全国豆類経営改善共励会の集団の部で、農林水産大臣賞を受賞されております。なお、栃木県黒磯市は、栃木県の北部に位置し、米のほか酪農が盛んなところです。

話し手：栃木県黒磯市
下・北・沓掛大豆機械利用組合
市村 利男さん
本沢 和さん
相馬 正一さん
和牛飼育農家(堆肥生産農家)
藤田 芳文さん



(左から順に市村さん、本沢さん、相馬さん、藤田さん)

1. 機械利用組合の設立の経緯と規模拡大について教えてください。

下・北・沓掛大豆機械利用組合は、平成9年に大型機械化一貫作業による大豆栽培を目標に3戸の農家で結成しました。

水稲の生産調整面積が増加しているなか、自分たちの転作地のほか、積極的に地域の農家から転作田を借り上げ、大豆、麦の作付面積を拡大しております。

2. 集団の作付けの状況と土地利用についての考え方を教えてください。

平成11年の作付けは、大豆23ha、麦類20ha、水稲31haです。平成12年は、麦、大豆が土地利用上本作となるので、11年秋に麦を27ha作付けしました。大豆は麦の後作となりますので、これに若干の転作田を加え30ha、水稲は25haを予定しております。

なお、大豆の連作障害を避けるため、「水稲－麦－大豆」の輪作体系を確立し、高品質、高収量の土地利用となるよう合理化に努めております。

3. 土づくり・堆肥の使用はどのようにしておりますか。

土づくりでは、畜産農家との稲わら交換で10a当たり1.5tの完熟堆肥を使用しております。すなわち、水稲をコンバインで収穫した後、稲わらを畜産農家がロールベラーで飼料として調整、搬出します。その後、畜産農家が1年熟させた完熟堆肥をマニュアルスプレッダーで散布してくれます。それから麦の播種、収穫、夏作の大豆作付けとなります。耕種農家は、堆肥に関する機械(ローダー、マニュアルスプレッダー等)は持っていませんし、これらの機械は全て畜産農家の所有です。

大豆の施肥については、元肥として堆肥を入れておりますので、大豆の生育に応じ追肥を行うようにしております。

4. 堆肥を施用した効果をどう感じておりますか。

収量の増につながっている感じがします。

(農協のコメント)

この集団の大豆の10a当たりの収量は、3カ年平均で274kg、県平均 200kgに比較する37%増となっております。土づくりなど基本技術の励行が単 収の増につながっております。

また、最近、生活協同組合等から豆腐等の原料となる国産大豆について、どこで、どういう栽培をしているかについて質問がくるなど関心が高まっている中で、豆腐工場等から「黒磯産大豆」は評価を受けておりますが、これも土 づくり等の積み上げの成果と思っております。

なお、転作の場合、水田大豆(麦)緊急対策事業によって、堆肥を散布 する等基本技術を実施した場合、転作奨励金に優遇措置がとられたことも転作 大豆の作付けの増加、収益の改善につながっているといえましょう。

5. 堆肥を供給してくれる畜産農家はどんな農家ですか。

集団では、栽培面積が大きいことから4戸の畜産農家と稲わらと交換で 堆肥を使用しております。利用する側としては、完熟した良い堆肥がほしいですね。堆肥を供給してくれる4戸の畜産農家はいずれも近くの知っている農家 で、信頼でき安心して堆肥の使用ができます。資源が地域でうまく循環できま すし畜産農家、耕種農家とも両方うまくいっております。

6. 堆肥を供給している畜産農家の声

和牛繁殖経営で成牛25頭規模の経営ですが、耕種農家から安定的に稲わら を確保でき、経営に多いに役立っています。堆肥は、牛の糞にモミガラを20% 程度混入し1年間完全に発酵させ製造しています。

堆肥の散布は、マニュアルスプレッダー等機械が完備しているので可能です。ただ、あまり遠方ですと、時間がかかりすぎ対応できません。



マニュアルスプレッダーによる堆肥散布

7. 堆肥利用について行政側への要望

堆肥利用については、ここでは、耕種農家と畜産農家との連携によりう まくいっているが、今後広域的に堆肥利用を進めていくには、公的な機関による堆肥の流通関連の情報の提供等が必要ではないでしょうか。認定農家の集まりで、中心となる堆肥センターのようなものが必要でないかとの意見がでています。